

東北工業大学

教職研究紀要

第10号

2025年3月

東北工業大学総合教育センター（教職分野）

目 次

教員としての資質・能力に関する自己評価の質的分析に向けて	小川 和久 … 1
「情報社会」概念の用法についての覚え書	片山 文雄 …11
執筆者紹介.....	19
総合教育センター（教職分野）2024 年度活動実績	20
教員養成審議委員会 2024 年度活動実績	32
東北工業大学教職研究紀要刊行規程.....	34

教員としての資質・能力に関する 自己評価の質的分析に向けて

Towards a Qualitative Analysis of Self-Evaluation of
Teacher's Competencies

小川 和久

OGAWA Kazuhisa

1. はじめに

教育実践に関する科目「教職実践演習」では、教員として身に付けるべき必要な資質・能力を4つの観点（①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③生徒理解や学級経営に関する事項、④教科内容の指導力に関する事項）から振り返り、各自の達成度と課題を再認識することを目的としている。中央教育審議会による答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について（平成18年7月）」¹⁾では、この科目は教職課程4年間における「学びの軌跡の集大成」として位置づけられるものとしており、習得が不十分な知識や技能等が確認されれば、その不足分を補完し定着を図ることが期待されるものと明示されている。

本学で開講している4年次後期の科目「教職実践演習（高）」では、教育実習での学びの経験を中心に、ICTの活用、特別支援教育、学校安全等の現代的課題を含めた振り返りを行い、自らの資質・能力に関してあらためて自己評価を行うよう働きかけている。本学では、資質・能力の自己評価を促すためのツールとして、「教職課程のためのポートフォリオ」と称する自己評価システムを活用している。1年次から4年次までの間、年次毎にループリックを用いた自己評価を繰り返すことで、学年進捗とともに自己評価がどのように変化したかを学生自身も自己理解できるようなシステムである。

小川・中島²⁾は、この自己評価システムに学生が入力したデータを分析することで、4年間の自己評価の変化について議論している。全体傾向として、資質・能力の項目群（子どもについての理解、コミュニケーション、教育実践など）毎に、自己評価が異なる変化を示すのではなく、どの項目群も自己評価が一様に向上していることが見出された。すなわち、4年間の教職課程の学びを通して得られた自らの成長感が表現

されているのではないかと解釈している。これは全体的な資質・能力の主観的な向上感であり、言い換えるならば自尊感情あるいは自己効力感の向上とも言え、教員としての適性がある程度身についたことを、適度な自信をもって意識しているものと推察する。

一方で、全体的な向上を示すデータからでは、資質・能力の諸側面に対する自己評価の変化を、より詳細に読み取ることは難しい。「教職課程のためのポートフォリオ」で用いられている評価項目はやや抽象的であり（たとえば、子どもについての理解に関する項目群では、「子どもの理解のために必要な心理・発達の基礎知識を習得していますか」という評価項目が用いられている）、さらに5段階評価を求めているため、量的なデータによって変化を概観するに留まっている。教職教育の質保証に有用な情報としては具体性を欠くことから、質的な自己評価データと組み合わせる必要がある。そこで新たな自己評価ツール「わたしの教職課程」と称する教材を開発し、自己評価の質的な変化をより具体化することとした。以下、教材「わたしの教職課程」について、その内容と活用方法について報告することとする。

2. 教材「わたしの教職課程」

教育実習は、教職履修生にとっては、1年次から積み重ねてきた学びの経験を大いに発揮する場である。一方で、現実の指導場面に関与してはじめて認識される課題も多々あり、ある意味、教育実習は自己評価に適した材料を様々な提供してくれるよい機会だと言える。

こうした考えのもと、2022年度・2023年度の「教職実践演習（高）」において、教育実習を振り返るという趣旨で、「わたしの教育実習」と題した教材（Microsoft 社 Power Point によるスライド作成課題）を配布し、自己評価を促す授業を行った。この教材は、タイトル頁を含め、5頁のスライドから構成される自己評価課題となっている。学生が課題として記述する項目は、「教育実習での担当授業の振り返り」、「担当授業以外の活動の振り返り」、「教職／専門科目の学びがどのように活かされたか」、「自己評価と課題」の4点である。全体を通して、教育実習での経験を振り返ることで、教員としての資質・能力がどの程度身についたかを問う教材となっている。授業では、各自、スライドを完成させ提出した後、一人5分程度で発表する時間を設けている。

この教材「わたしの教育実習」では、教育実習での経験を中心とした振り返りが求められるが、他の教職関連および専門教科の科目も含めた4年間の学びを、総合的に振り返ることにはなっていない。そこで、2024年度から、教材「わたしの教育実習」に改良を加え、「わたしの教職課程」という名称に変更して、新たな教材を作成する

こととした。

改良版の教材「わたしの教職課程」では、タイトル頁を含め6頁構成とし、学生が課題として記述する項目は、「教職科目・一日実習での学びがどのように活かされたか」、「専門科目での学びがどのように活かされたか」、「教育実習での担当授業の振り返り」、「担当授業以外の活動の振り返り」、「自己評価と課題」の5点である。各頁の詳細は、次の通りである。

・ 1 頁目：タイトル（主題と副題）

主題「わたしの教職課程」に加えて副題を記入する。4年間の学びを副題として一言で表現することで、教職課程での一人ひとりの自己像をあらためて見つめ直すよう導く。その他、学生番号、氏名、教育実習校等の情報をこの頁に記入する。

・ 2 頁目：教職科目・一日実習での学びがどのように活かされたか（図1参照）

この頁では、教職関連科目および本学で独自に実施している一日実習（近隣の高等学校での授業参加、学校現場の生徒・教員との交流など）での学習経験が、自らの資質・能力の習得にどのように活かされたかを振り返る。

教職科目・一日実習での学びがどのように活かされたか

〔教職科目との関連性について〕

〔一日実習との関連性について〕

風景写真、資料などがあれば貼付

- ・ 教職科目の授業で学んだことや、一日実習で経験したことを振り返り、あなたの教員としての資質・能力の習得にどのように活かされたのか、考察してください。
- ・ 教員養成に関わる様々な知識・理解・実践（生徒理解、具体的な指導方法、学校現場の体験など）と、身についた資質・能力との関連性について、具体的に考察してください。

図1 教材「わたしの教職課程」：スライド2頁目のひな形

・ 3 頁目：専門科目での学びがどのように活かされたか

この頁では、所属学科で開講されている専門教科での学習経験が、教員としての資質・能力の習得にどのように影響したかを洞察する。とくに教科指導力は、身に付けた専門的能力に大いに依存し、取得を目指す免許状の種類とも密接に関連する。

教育実習で担当した授業において、もし専門的な内容に関する知識と理解が不十分であれば、分かりやすい授業を展開することは難しくなる。主に教育実践での経験が自己評価の判断材料とはなるが、自らの教科指導力という観点から、専門教科での学びをこの頁で振り返ることになる。

・ 4 頁目：教育実習での担当授業の振り返り（図2参照）

教育実習で受けもった授業での経験を振り返り、授業を担当する力がどの程度身についているを考察する。前述の専門性に加えて、実践場面での生徒の反応が重要な判断材料となり得る。授業内容を分かりやすく説明することができたか、生徒は興味関心をもって授業に参加したか、生徒への学習指導は適切であったか、授業を円滑に展開することができたかなど、振り返る材料は多い。板書計画、教材研究、指導案の作成など、資質・能力の基礎に関わることも加えて、可能な限り、授業を担当しているときの自分の姿を客観的に見つめ直し、自己評価を行うよう指示した。

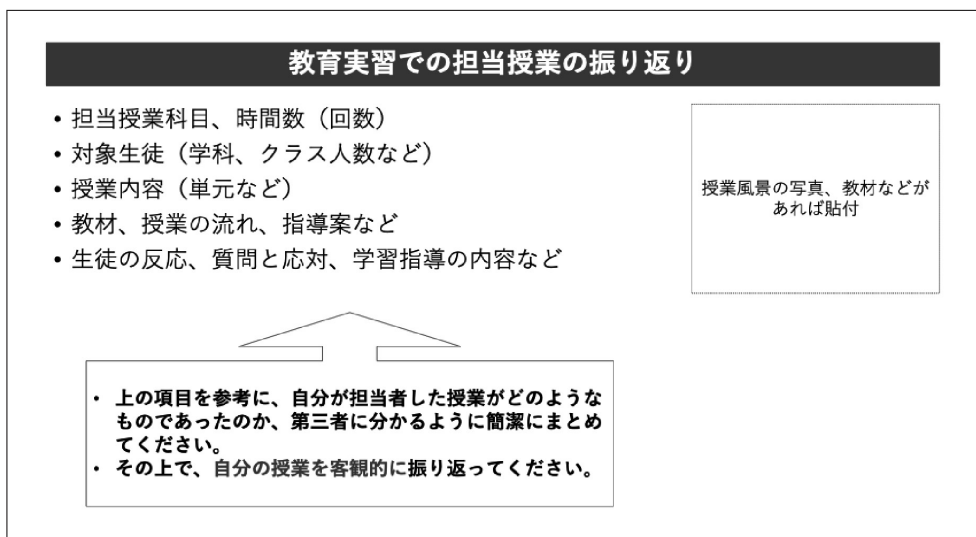


図2 教材「わたしの教職課程」：スライド4頁目のひな形

・ 5 頁目：担当授業以外の活動の振り返り

教育実習の期間中、部活動、学校行事、清掃時間など、授業以外の場面においても生徒と交流する機会があり、生徒理解や対人コミュニケーションに関わる資質・能力を振り返る経験が様々に得られる。生徒との関係づくりが授業展開にどのように影響したかなど、授業時の姿だけに限定することなく、多面的な視点をもって資質・能力を自己評価するように求めた。生徒との会話における戸惑い、生徒との距離感の取り方の難しさ、人生の指南役としての役割など、多くの教職履修生が、生

徒とのコミュニケーションに関連する内容を報告している。自らの社会性の発達や対人コミュニケーション能力に関わる事項を、この頁で振り返ることになる。

・ 6頁目：自己評価と課題（図3参照）

最後の6頁において、4年間の教職課程での学びを総合的に振り返る。最終的に、何ができて何ができていないのかと自問自答しながら、自らの資質・能力について評価をまとめる。その際、図3に示されている通り、4つの観点（①使命感・責任感・教育的愛情、②社会性・対人関係能力、③生徒理解・学級経営、④教科内容の指導力）から、資質・能力として習得できたことと課題として残っていることを明確にし、今後さらに学び続けたい事項を記述する。

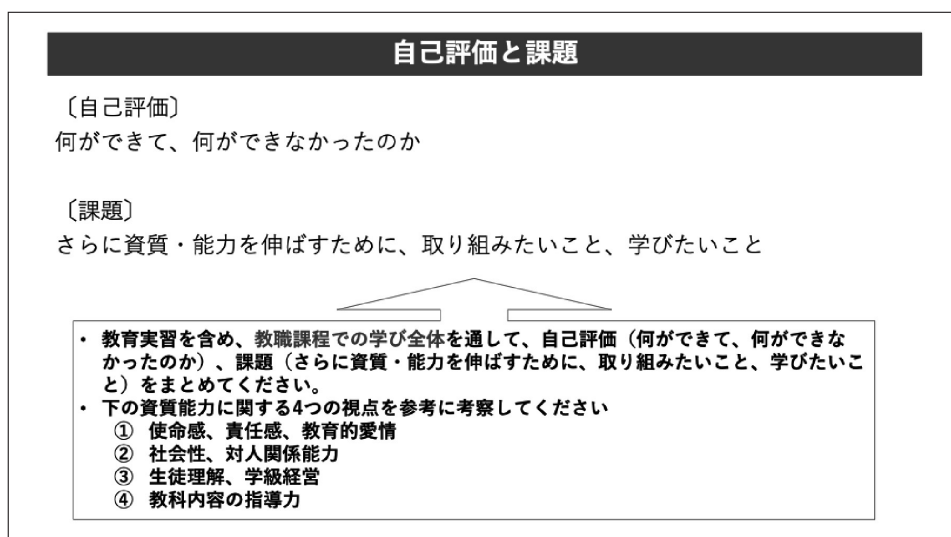


図3 教材「わたしの教職課程」：スライド6頁目のひな形

3. 課題の進め方

2024年度の「教職実践演習（高）」の主な授業内容は次の通りである。講義「教員の役割と使命」、講義「教育と現代的課題（教員が知るべき法、学校安全）」、グループ討議「よい授業とは（教育実習の振り返り）」、教育実践「3年次生に対して模擬授業をデモンストレーション」、一日実習「聴覚支援学校の生徒・教員との交流」、発表会「わたしの教職課程」である。最後に、完成させたスライド教材「わたしの教職課程」を用いて、専門教科を担当する学科教員と面談し、4年間の教職課程と教育実習での学びについて報告する流れとなっている。

前掲の教材「わたしの教職課程」のスライドのひな形は、Google Workspace のア

プリ Classroom を用いて、発表会の約1ヶ月前に各自に提供され、教材の趣旨と作成の仕方について説明が行われた。発表会までに完成させて、Classroom を介して提出するように求めた。発表会では、各自、質疑応答を含め3～5分程度で発表し、授業担当教員および他の教職履修生と意見交流を行った。教員からのコメントだけでなく、他の学生からも質問や意見があり、活発な議論の場となった。こうした意見交流を通して、一人ひとりが4年間の学びの経験を振り返り、教員としての資質・能力についてあらためて自己評価を行い、教職教育を修了する。

4. 教職履修生の反応と振り返り教材の役割

自らの資質・能力を評価するための材料を様々な提供してくれるのが、教育実習での経験である。実際に、生徒を前にして授業を行い、生徒とやりとりしながら学習指導を進めていく場面に接してはじめて、教員としての力が身についているかどうかを実感される。授業展開につまずきを経験すれば、教科指導力に課題があることが理解されるし、生徒とのコミュニケーションに戸惑いを経験すれば、対人関係構築力に課題があることが認識される。また、授業以外の場面、たとえば部活動、清掃等の時間においても生徒と交流する機会があり、生徒理解や教員としての使命感などの側面について、様々な課題が意識されることになる。

今回試行した振り返り教材「わたしの教職課程」に対する学生の記述内容を、教育実習での経験を中心にケース毎に分析すると、教職課程での様々な学びの経験がどのように相互に関連づけられ、それらが資質・能力としてどのように構造化されていくのかについて、共通した構図が見えてくる。とくに、次の2種類の構図が、学生の自己評価に明確に表現されている。一つが、教職関連科目での学びが教育実習での対応に影響を及ぼすという構図であり、もう一つが専門教科での学びが教育実習での対応に影響を及ぼすという構図である。

まず前者の教職関連科目での学びの影響であるが、学生の記述内容から、表1のような構図が見出される。

教育実践に関する科目において、指導案の作成や模擬授業を繰り返すという体験は、教育実習時の対応に直接的な効果をもたらす。授業のシミュレーション訓練を事前に受けているとも言え、実践力に関わる資質・能力の育成には、これら教育実践に関わる科目での学びが不可欠である。一方で、一日実習として学校現場を視察することや、基礎的な知識を習得し理解を深める学びも、実践力の育成に間接的な影響を与える。可能であれば、教育実習後に再び学校現場の視察や理論的な学習があると、自らの姿をより客観的に評価することになり、一時的に身についた教育実践の力がより確かな

ものとして定着するのではないかと考える。

次に、専門教科での学びと、教育実践に関わる資質・能力との対応関係について考察する。表2に、学生の記述内容に見出される典型的な対応関係をいくつか紹介する。

とくに記述が目立ったのは、専門教科での学びが教材研究に役立つということである。高校の教科書だけでは、現実社会との結びつきを考える視点が十分に提供されていない。説明の幅を広げて、生徒の興味関心を導く授業を展開するためには、専門教科で学んだ知識や技術は非常に有用だったという振り返りである。

さらに、実験やデータ解析に関する大学での授業が、生徒の主体的な課題発見や課

表1 教職関連科目での学びが資質・能力の獲得に及ぼす影響

学びの経験	関連する資質・能力の諸側面
模擬授業の体験 (教育実習事前・事後指導、教科指導法など、教育実践に関する科目)	・指導案の作成方法 ・目標の設定と課題の抽出 ・授業内容の構成と組み立て ・時間配分、時間管理 など
授業見学や生徒との交流体験 (学校現場での一日実習)	・授業時の状況把握と予測(自分の行動と生徒の反応との関係性) ・生徒理解やコミュニケーションの取り方 ・授業前後のクラスの雰囲気づくり ・想定する状況と現実の状況とのギャップの縮小 ・生徒の個性を伸ばす指導 など
基礎的な知識・理解 (生徒・進路指導論、教育心理学など、教育の基礎的理解や生徒指導等に関する科目)	・生徒理解(青年期の発達特性や心理など) ・生徒との接し方 ・教員としての使命感や役割 など

表2 専門教科での学びが資質・能力の獲得に及ぼす影響

学びの経験	関連する資質・能力の諸側面
実験や解析などの授業	・結果について考察することで、生徒の課題発見や課題解決の能力を向上させることができた ・データの整理と考察により、生徒の主体的な学びを導くことができた など
専門分野の知識や技術	・教科書に記述されていない知識を念頭に置きながら説明することができた ・現実社会と関連づけて説明することができた ・教材研究に役立った など

題解決に役立つという関係性が見出された。学生自身が主体的に学んだという経験が、今度は、生徒の主体的な学びに応用されるという構図である。この構図を成立させるためには、大学での授業において、学生の主体的な学びが実践されていることが前提となる。

5. まとめと今後の課題

資質・能力の自己評価を質的に分析することで、2つの利点を得られる。第一に、自らの資質・能力の形成過程が可視化されるという利点である。教員という職業に関するキャリア形成の軌跡を自ら辿っていくという内省的な視点が獲得されるので、次に何をどのように学ぶべきか、将来にわたって学び続けるための方向性が具体化されることになる。

第二に、教職関連および専門教科の科目において、資質・能力を育むプロセスの最適化と授業改善がより具体化するという利点である。とりわけ実践的な内容、たとえば教職関連であれば、模擬授業や指導案の作成課題は、教育実習時の授業場面に直結する。専門教科であれば、実験・データ解析の体験や専門的な知識の習得が教材研究に役立つ。一方で、理論的な科目についても、生徒理解や学級経営等に役立つことを学生は認識しており、実践的な科目と理論的な科目を有機的に融合させながら、資質・能力が効果的に向上するよう授業改善を図る必要がある。

授業展開の実践や生徒とのコミュニケーションといった初歩的な資質・能力に加えて、より高次の資質・能力について言及する学生がいた。たとえば、生徒間の学習能力差に応じた指導の仕方、不適切な行動をとる生徒への注意喚起の仕方、生徒との良好な関係を維持しつつも、指導すべきことは指導するというジレンマの克服などである。現実の学習指導や生徒指導は容易なものはない。教員としての資質・能力には階層性ともいえるべき構造特性があって、初歩的な段階を乗り越えたら、さらに困難な場面が様々に待ち構えており、それらを乗り越えるために、より高次の資質・能力が問われることになる。

資質・能力に関するこのような形成過程を可視化することができれば、教員の養成・採用・研修という一体的な取組に対しても、有用な基礎資料が得られるのではないかと考える。引き続き、振り返り教材「わたしの教職課程」を試行していき、資質・能力の形成過程についてより詳細な質的分析が可能となるよう、実証的データを蓄積していきたい。

文 献

- 1) 中央教育審議会（2006）. 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）、
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm [2025.3]
- 2) 小川和久・中島夏子（2023）. 教職履修生による教員としての資質能力に関する自己評価、東北工業大学教職研究紀要、第8号、7-16.

「情報社会」概念の用法についての覚え書

A Memorandum on the Usage of the Concept of “Information Society”

片山 文雄

KATAYAMA Fumio

1. はじめに

本稿の目的はささやかなものである。高等学校情報科の教員養成のための講義において、「情報社会」という概念をどのように用いるべきかに関する若干の予備的検討を行うことである。

教育職員免許法施行規則第5条表備考カによれば、高等学校情報の教員免許を取得するためには「情報社会（職業に関する内容を含む）・情報倫理」に関する科目の単位を取得する必要がある。また学習指導要領（平成30年告示）は、高等学校情報科の目標として「情報と情報技術及びこれらを活用して問題を発見・解決する方法について理解を深め技能を習得するとともに、情報社会と人との関わりについての理解を深めるようにする。」「情報と情報技術を適切に活用するとともに、情報社会に主体的に参画する態度を養う。」などと定める。このように、情報社会という語はあたかも自明な語のようにして用いられている。

しかし「情報社会」は取扱注意の言葉である。この語は日本で1960年代半ばから使われ始めたが¹、論者によって異なる意味を込められてきたし、用法も一つではない。この点に留意することは、情報科教員にとっても、生徒・学生にとっても「情報

¹ 「情報社会」という語は、1963年1月に『放送朝日』誌に掲載された梅棹忠夫の「情報産業論」がきっかけとなって企画された同誌1964年1月号の特集「情報社会のソシオロジー」が初出である。1968年には増田米二『情報社会入門』ぺりかん社、1969年には林雄二郎『情報化社会』講談社が刊行された。なお information society という英語は1970年に増田が「情報社会」を英訳したものが初出である。以上について参照、伊藤陽一「情報社会論－その系譜と理論的諸課題」、公文俊平編『リーディングス 情報社会』NTT出版、2003年所収。本書は「情報社会」論の有益なアンソロジーであり、梅棹忠夫、村上泰亮、増田米二、ケネス・ボールディング、ダニエル・ベル、アルビン・トフラー、ニコラス・ネグロポンテなどの論文が収録されている。

社会に主体的に参画する態度を養う」うえで一定の意義があるかもしれない。以下、「情報社会」の用法を三つに整理して若干のサーヴェイを行い、それぞれの用法が持ちうるメリット・デメリットをごく簡潔に整理することにする²。

2. 情報社会とは、情報技術によってさまざまな問題が生じ続けるフィールドである

情報社会を「情報技術の浸透がもたらす生活一般上の諸変化、諸問題が発生するフィールド（場）」と非常に広く、緩やかに捉える立場がある。この立場の特徴は、情報社会という概念をあえてはっきりと定義しない点にある。

この立場の例は、例えば、高等学校情報科「情教Ⅰ」教員研修用教材（文部科学省）に見られる。その第1章は「情報社会の問題解決」と題され、情報セキュリティ、情報に関する法（知的財産、個人情報など）、情報モラル、情報社会におけるコミュニケーションの特徴などが扱われる³。「情報社会は光と影の両面を持っている。残念ながら良い点ばかりではなく、問題も生じているのが現実である。／しかし、事故が起こるからといって、世の中から電車や自動車を無くそう、ということが現実的ではないのと同じように、問題があるからといって、今からインターネットがない社会に逆戻りすることはできないだろう⁴。」このように「情教Ⅰ」教員研修用教材は、コンピュータやインターネットに代表される「情報技術が人や社会に果たす役割と及ぼす影響」⁵を重視し、情報技術が問題を生み出しているフィールドを情報社会と呼んでいるのである。そして次々に生じてくるであろう新たな問題に対して、情報技術を適切に活用しつつ、法律の知識や情報モラル、マナーなどを広く修得して、上手に対処できる能力を育成するという教育目標が立てられることになる。

情報科の教育において「情報社会」をこのように用いることには、新しい情報機器・

² 本稿では「情報社会」という語と「情報化社会」という語を区別しないで扱うことにする。両者の意味と用法の差異は興味深い問題であるが（両者の差異を注意深く検討する例として、大黒岳彦『「情報社会」とは何か？ 〈メディア〉論への前哨』NTT出版、2010年。小山昌宏「現代における情報社会概念の再検討 情報化社会における「情報文化」と「社会文化」の融合について」『社会文化研究』第13巻（2011）所収などを挙げておく）、しかし議論は収束しておらず通説はないようである。また本稿の限られた狙いからするとこの区別はさほどの重要性をもたない。

³ 高等学校情報科「情教Ⅰ」教員研修用教材（文部科学省）、14-55頁。

⁴ 同上、43頁。

⁵ 同上、14頁。

情報技術が次々に生み出すさまざまな問題やトピックを何でも扱うことができるというメリットがある。

しかしデメリットも考えられる。第一に、情報社会という社会の性格規定が曖昧になる。コンピュータやインターネットが浸透しさまざまな問題が生じる社会、という規定しかない⁶。第二に、このような用法では、情報社会という概念を用いること自体の意義が不明瞭となる。情報機器の浸透が生み出すさまざまな問題が生じるフィールドを情報社会と定義するなら、その始まりをコンピュータやインターネットが社会に浸透した1990年代半ばとみなすことはできるであろうが、その終わりを想像することは難しい（社会が情報技術を放棄することは考えづらいから）。ゆえにこれからの社会はすべて情報社会であるだろう⁷。この極めて包括的な概念が社会を知るためにどれほど有効であるのか、また情報化教育にとってこの概念が必要なものか、疑問が残らないわけではない。

3. 情報社会とは、社会発展段階説における、産業社会の後に来る社会である

情報社会を「産業社会に続く、新たな社会」と捉える立場がある。社会が段階的に発展するという理論枠組を前提としたうえで、情報社会という新しい社会がこれから到来するとの未来予測を行うのである。

この立場の典型例は、1960年代に日本やアメリカ合州国で広く流布された、未来学と呼ばれた一連の議論である。例えばアルビン・トフラーは、『未来の衝撃』『第三の波』『パワー・シフト』⁸などのベストセラーにおいて、人類史を農業革命、産業革

⁶ 既存の「情報」教科書も、文部科学省の上記の基本姿勢に従い多様なトピックを広く扱わなければならないという制約からであろうか、情報社会という概念について深い検討を行っていない（筆者のこだわりの従って若干の個性的定義が見られるが）。

⁷ 授業での学生との対話などを踏まえると、1990年代半ば以降に生まれ、情報機器の浸透を自明な環境としている世代には、このような広く漠然とした意味で「情報社会」という概念を用いる理由は理解しにくいようである。彼ら彼女らにとってこの意味での情報社会は社会そのものだからだ。逆に言えば、情報社会という概念に漠然とした新しさを感じ、この概念を用いて有意義なことが言えると思なす世代はいずれ消えると思われる。

⁸ アルビン・トフラー『未来の衝撃』徳山二郎訳、実業之日本社、1971年（原著1970年）、同『第三の波』鈴木健次・桜井元雄訳、徳山二郎監修、日本放送出版協会、1980年（原著1980年）、同『パワー・シフト 21世紀へと変容する知識と富と暴力』上・下、徳山二郎訳、フジテレビ出版、1990年（原著1990年）。

命、そして情報革命という三つの大変化の継起として解釈した。彼は1950年代後半から西欧諸国は情報革命を迎えつつあるとみなし、産業社会の後の社会 post-industrial society を「情報時代 information age」と呼んだ。情報時代はおもに経済とくに生産方式の変化によって特徴づけられる⁹。産業社会における生産方式の特質は、標準化された商品を、工場に集められた人々が集中的・同時的かつ大量に生産することとされ、それが社会を富裕化するとともに、マスメディア、大衆娯楽、官僚制など集中・大量・標準化された制度を支配的なものとした。それに対して情報時代においてはこれらの特徴がすべて反転するという。画一化されない多様な商品が求められるようになり、情報処理技術の進展によりそれを分散的・非同時的に少量だけ生産し、多様な消費者に届けることが可能になる。労働も分散的・非同時的となり、郊外の自宅でそれぞれのタイミングで生産ができるようになる（これは現在のテレワークそのものである）。

情報技術の進展を土台として産業社会の後の新しい社会の到来を展望するという議論は、ダニエル・ベルの脱産業社会論¹⁰、増田米二のいっそう体系的・包括的な「情報社会論¹¹」なども、大枠では共通している。また例えばドイツ政府のIndustrie4.0論（2011年¹²）、日本政府の第5期科学技術基本計画であるSociety5.0論（2016年¹³）などにも引き継がれている。

トフラーをはじめとする論者たちが、産業社会の次に来るべき社会として情報社会を大胆に展望したことは貴重な試みであり、さまざまな点で現在の状況を予見したことは驚くべきことである。情報社会という概念がまずはこのような未来予測として登場したこと、社会発展段階論を前提にして組み立てられた概念であったこと、そこに溢れていた刺激的な未来への明るい希望を知ることが、情報科教育にかかわる者にとっても興味深いことであるに違いない。

とはいえ、これらの議論は方法論上の曖昧さを残しており、十分な根拠なしにアイ

⁹ この点でマルクス主義の社会発展段階論との近さ、そして対抗の意図を読み取ることもできるだろう。

¹⁰ ダニエル・ベル『脱工業社会の到来－社会予測の一つの試み』上・下、内田忠夫ほか訳、ダイヤモンド社、1975年（原著1973年）。

¹¹ 増田米二『原典情報社会－機会開発者の時代へ』、TBSブリタニカ、1985年。

¹² <https://platformindustrie40.at/>（2025年2月14日アクセス）

¹³ https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/（2025年2月14日アクセス）日本政府のSociety5.0論は、サイバー空間とフィジカル空間が高度に融合し、AIや自動化ロボットが情報にもとづいて人に教え人を助ける「超スマート社会」の到来を展望する。

ディアを奔放に並べた叙述が多く、実証的な議論とはいいいにくい。そのため社会発展段階論自体がいまや説得力を大きく失っている。この議論を——思想史的検討の対象としてではなく——現在においてそのまま主張することは難しい¹⁴。

4. 情報社会とは、情報技術がもたらす、近代社会の諸側面における変容の総体である

論者本人たちが明確に主張しているとは必ずしもいえないが、情報社会を「情報技術がもたらす、近代社会の諸側面における変容の総体」と捉える立場がある。未来予測に重点を置くトフラーらの議論に対し、情報技術の浸透がすでに大きな社会的変化をもたらしているという前提に立ち、社会の諸側面——コミュニケーションの在り方、経済、政治、法など——に即して、この変化の実態をより具体的につかもうとする論者たちである。近年、非常に多様な議論が展開されている。

例えば社会学の分野では情報社会の底流にある基礎的变化を探る試みがいくつも続けられている。圓田偉男は「非対面的でありながら双方向的なコミュニケーション」（そこから群集心理の蔓延、責任の分散が問題とされる）、「複製という暴力」（そこから知的財産権やプライバシーをめぐる問題が生じる）などを挙げている¹⁵。大黒岳彦は、「『情報』によって既存社会の基盤、枠組みそのものが雪崩的に抜本的な組み替えを遂げた」とし、その重点を①われわれが生きる世界が、現実世界と情報世界＝電脳世界とに二重化したこと、②情報がそれ自体独自のネットワーク・システムを形成すること、などに見出す¹⁶。また奥野卓司は、情報技術がミクロな人間関係・人間行動にもたらす影響をフィールド調査などで追跡することを通じて、なぜ人間が情報化したかという大きな問いを追求する学問「情報人類学」を提案する¹⁷。

情報技術がもたらす経済活動の変容についての議論は極めて多い。生産、流通、消

¹⁴ 社会学者の佐藤俊樹はさらに辛辣に「情報社会（佐藤は「情報化社会」の語を用いる）が到来して近代産業社会が根本的に変化する」という議論そのものの危うさを批判する。第一に、それは技術の発展が社会を変化させると信じる技術決定論であるが、社会における変化への欲望を見ていない点で誤りである。第二に、新しい社会の到来を人々が求めてしまうのはじつは19世紀型近代産業社会のメカニズム（産業資本主義と社会統制思想）に起因しており、その意味で新たな社会としての情報社会は近代社会が求めている「夢」である。佐藤『社会は情報化の夢を見る 〔新世紀版〕ノイマンの夢・近代の欲望』河出文庫、2010年。

¹⁵ 圓田偉男『情報社会学の基礎』学文社、2012年、64頁以下、72頁以下。

¹⁶ 大黒前掲書、28頁。

¹⁷ 奥野卓司『情報人類学の射程 フィールドから情報社会を読み解く』岩波書店、2009年。

費それぞれの側面で情報技術がもたらしている変化は、物流システムの規格化、個人情報を利用したマーケティング、データ産業の勃興まで幅広く、日進月歩で変容が続けている。労働の面でも、テレワーク、ウーバーなどのギグワーク、スキマバイトなどは情報技術の進展なしに考えられない新たな労働形態である。

政治活動とくに政治に関するコミュニケーションの変容については、例えば台湾のデジタル大臣として現実政治に関わるタンは、情報技術がもたらす開放性と透明性を強調し、それを土台として政府と市民との相互信頼・相互のアイデア交換がなされる民主的な情報社会像を提示する¹⁸。他方、英国のシンクタンクで働くジャーナリストであるバートレットは、情報社会の基盤たるデジタル技術がフェイクニュースやフィルターバブル効果により市民を極端な意見をもつ小集団にまとめてしまい（「部族化」）、マイクロターゲティング技術により選挙などでの市民の選好も操作するようになり、その結果として少数のテック企業に権力が集中していくという情報社会像を提示する¹⁹。

以上のような立場、つまり社会の諸側面において情報技術がもたらす変化を確定し、それを情報社会（の側面）として提示するというアプローチは、情報社会の実質を学ぶうえで大きなメリットをもつだろう。もちろん課題もある。この立場からすると、情報社会とは、社会学、経済学、政治学、法学などさまざまなディシプリンにもとづくさまざまな変化を並べたものとなるだろう。それが結局は体系的でない、トピックの羅列的なものになってしまう——その意味で、第一の立場に接近してしまう——可能性はある²⁰。もしそれでは十分でないとするれば、諸研究をどうつないで総体的な情報社会像をつくりだすかという難問に取り組む必要があり、その試みはまだ初歩的段階にある。それでも、情報社会という概念を放棄することなく用い続けるのであれば、この立場がもっとも有望と筆者には思われる。

¹⁸ オードリー・タン『オードリー・タンが語るデジタル民主主義』大野和基訳、NHK 出版、2022 年。

¹⁹ ジェイミー・バートレット『操られる民主主義：デジタル・テクノロジーはいかにして社会を破壊するか』秋山勝訳、草思社、2020。

²⁰ 例えば「情報社会」の語を冠するあるテキストは「経済経営、産業、科学研究、政策、地方自治、生活、コミュニケーション、法律、国際関係など」の諸トピックにおいて情報技術がもたらした社会変化を扱う。それぞれ専門性が高く興味深い議論が並ぶが、トピック間の関連は示されていない。児玉晴男・小牧省三編著『改訂版 進化する情報社会（放送大学教材）』放送大学教育振興会、2015 年、3 頁。

5. おわりに

本稿では情報社会という概念の用法を三種類に整理し、それぞれのメリットとデメリットをごく簡単に検討した。そして、情報技術によって生じた社会の諸側面における変化を調査し、その総体を情報社会ととらえる立場に立つことがよいだろうと判断した。しかし、情報社会の総体をどうとらえるかという課題は大きく、まだ初歩的段階にある。情報科教育における「情報社会」概念は更なる練り上げを必要としている。本稿はそのためのごくささやかな予備的検討にすぎない。

執筆者紹介（執筆順）

小川 和久	総合教育センター教授
片山 文雄	総合教育センター教授

総合教育センター（教職分野）2024 年度活動実績

1. 年間の活動

4 月	9 日 10 日 19 日	教育実習オリエンテーション（4 年次） 教育実習申し込みに向けてのオリエンテーション（3 年次） 宮城県教員採用説明会
5 月	13 日 20 日	教育実習（4 年次） 9 月まで実施（21 校 26 名） 第 1 回 教員養成審議委員会【持ち回り形式】 全国私立大学教職課程協会 第 42 回研究大会 「令和新時代の教員養成－私立大学教職課程の責任と可能性」
6 月	28 日	第 2 回 教員養成審議委員会
7 月		公立学校教員採用試験 二次対策（個人面接、論作文）
8 月		公立学校教員採用試験 二次対策（個人面接、集団面接、論作文）
9 月	16 日 23 日 27 日	臨時 教員養成審議委員会 高校教育として働く工大 OB・OG との交流会 第 3 回 教員養成審議委員会【持ち回り形式】
10 月		
11 月	1 日 22 日	宮城県立聴覚支援学校「一日実習」（4 年次） 仙台市立仙台工業高等学校「一日実習」（2 年次）
12 月	11 日 19 日	仙台城南高等学校「一日実習」（3 年次） 宮城県教員採用説明会
1 月		
2 月	13 日 14 日	教職 FSD 研修会 「教職ポートフォリオ（学修成果可視化システム）の運用について」 第 4 回 教員養成審議委員会
3 月	17 日	第 5 回 教員養成審議委員会

2. 活動の様子



11月22日 2年次
仙台市立仙台工業高等学校で「一日実習」を実施しました。
15名が参加、学校現場の状況などについてお話を伺うとともに、授業・施設の見学等を行いました。



12月11日 3年次
仙台城南高校で「一日実習」を実施しました。
22名が参加、先生方から講話をいただき、授業見学を行うとともに、5グループに分かれて、1年生の「探究基礎」の時間に大学生活の紹介などの授業実践を行いました。

3. 教員免許取得者

工学部

電気電子工学科			情報通信工学科		
工業	情報	専修	工業	情報	専修
1	2	－	1	6	－

都市マネジメント学科	
工業	専修
1	－

環境応用化学科	
工業	専修
2	－

建築学部

建築学科	
工業	専修
11	－

ライフデザイン学部

産業デザイン学科	生活デザイン学科	経営コミュニケーション学科	デザイン工学専攻
工業	工業	商業	専修
－	2	2	－

合計				合計	人数
工業	情報	商業	専修		
18	8	2	－	28	26

4. 2024 年度 教員就職の状況（新規採用） * 総合教育センターが把握している者のみ掲載

2024 年度 卒業生	【学部】 ・ 環境応用化学科 （宮城県 公立高校 教諭（工業）） ・ 建築学科 （仙台市 公立高校 教諭（工業））
既卒生	・ 情報通信工学科 2022 年度卒（茨城県 公立学校 教諭（情報））

5. 教職のための学修ポートフォリオ

本学では、「1. 学校教育についての理解」、「2. 子どもについての理解」、「3. 他者との連携・協力」、「4. コミュニケーション」、「5. 教科・教職課程に関する基礎知識・技能」、「6. 教育実践」の6つの領域に関して、学生達が毎年、自己評価を行っています。各領域は、以下の表にある通り、さらに3つの項目に分かれていて、それぞれについて、「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」の基準から選ぶと、レーダーチャートにその平均点が表示されます。

教員に必要な資質についての自己評価項目

1. 学校教育についての理解

教職の意義

教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。

教育の理念・教育史・思想の理解

教育の理念、教育に対する歴史・思想についての基礎理論・知識及びその現代的課題を理解していますか。

学校教育の社会的・制度的・経営的理解

学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識およびその現代的課題を理解していますか。

2. 子どもについての理解

心理・発達論的な子ども理解

子ども理解のために必要な心理・発達の基礎知識を習得していますか。

学修集団の形成

学修集団形成に必要な基礎理論・知識を習得していますか。

子どもの状況に応じた対応

いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子供の特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。

3. 他者との連携・協力

保護者・地域との連携協力

保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。

他者との連携・協力、役割遂行

集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。

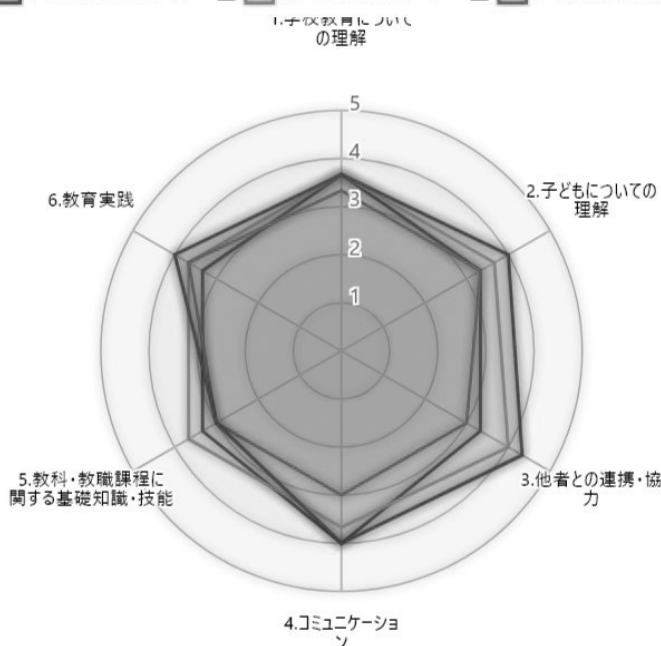
子どもの状況に応じた対応 いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子供の特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。
<u>4. コミュニケーション</u> 発達段階に対応したコミュニケーション 子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができますか。 子どもに対する態度 気軽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができますか。 公平・受容的態度 子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができますか。
<u>5. 教科・教職課程に関する基礎知識・技能</u> 専門教科に関する基礎知識・技能 工業科・商業科 工業／商業／情報の分野の科目について理解していますか。 教育課程の構成に関する基礎理論・知識 学習指導要領や教科書などの教育課程に関する基礎理論・知識を習得していますか。（教育課程：教科・総合的な探究の時間・特別活動・道徳教育） 学習指導法 情報教育機器の活用を含む学習指導法にかかる基礎理論・知識を習得していますか。
<u>6. 教育実践</u> 教材の分析・開発 教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を分析・開発し、指導案としてまとめることができますか。 授業展開力 子どもの反応を活かし、適切な板書や発問をしながら授業を展開することができますか。 学級経営力 学級経営に必要な、集団をまとめて導く力を身につけていますか。

受講生が作成したポートフォリオのレーダーチャートを3つ紹介します。

【学生1（工学部）】

レーダーチャート

□ 1年次自己評価シート □ 2年次自己評価シート □ 3年次自己評価シート □ 4年次自己評価シート

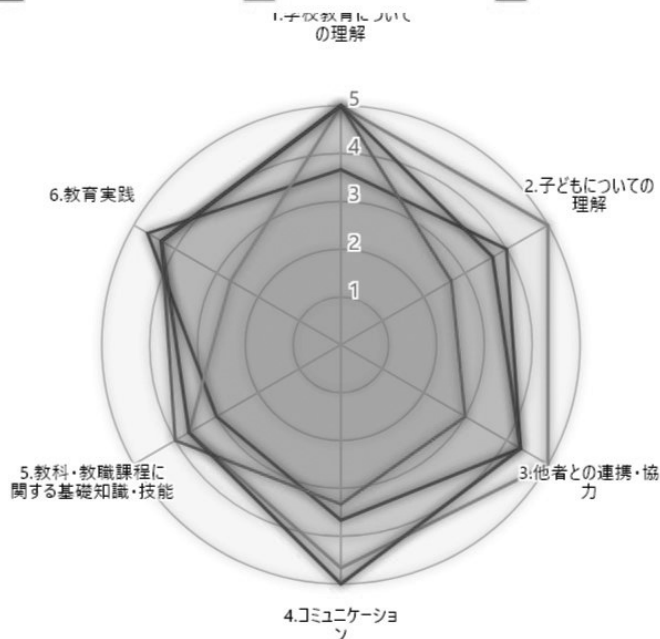


- ・全体として、1年次から4年次までの変化が少ないことから、自己評価が安定していることが伺える。
- ・1年次で高評価だったコミュニケーションが2年次、3年次とむしろ低くなったことは、教職課程における学習やグループワークなどの経験を踏まえ、自己評価を誠実に見直したのであろう。それが4年次に再び高評価になっていることは、おもに教育実習での経験が寄与していると考えられる。
- ・子どもについての理解、他者との連携・協力、教育実践などの自己評価は学年を追うことに着実に高まっている。

【学生 2（工学部）】

レーダーチャート

□ 1年次自己評価シート □ 2年次自己評価シート □ 3年次自己評価シート □ 4年次自己評価シート

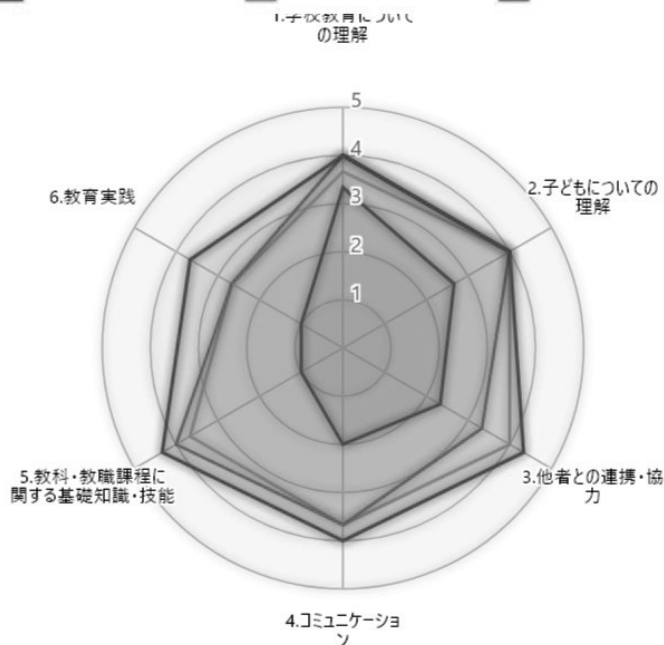


- ・全体として自己評価の変動が大きく、学年ごとに自分を誠実に見つめ直していることが伺える。
- ・学年を追うことに自己評価が順調に向上している項目（学校教育についての理解、コミュニケーション、教科・教職課程に関する基礎知識・技能）と、逆に低下している項目（子どもについての理解、他者との連携・協力）がある。低下している項目については、より深い学習と経験を積むことにより、自己評価が厳しくなったものと推察される。

【学生3（工学部）】

レーダーチャート

□ 1年次自己評価シート □ 2年次自己評価シート □ 3年次自己評価シート □ 4年次自己評価シート



- ・ 全体として自己評価が大きく向上している。1年次の自己評価の低さが目立つが、低い項目は教科・教職課程に関する基礎知識・技能、教育実践であり、1年次ではまた学習が進んでいない項目であるから低評価はむしろ当然と考えられる。自分の能力・資質について厳格に評価しているといえる。
- ・ 学年が進み学習と経験を積むにつれ、多くの項目についての自己評価が着実に、かつ飛躍的に向上している。全項目において4年次の自己評価が最高となっていることから、教職課程において身に着けた自分の能力・資質についての自負が伺える。

6. 「教職実践演習」(4年次) レポート 「教職課程・教職実践演習を通して学んだこと」

工学部 都市マネジメント学科4年 鈴木りな

教職課程の中で特に印象に残ったのは「教育制度論」の授業である。そこでは日本ではどのような教育制度があるのかについてや、制度の役割について学んだ。その他にも、教育時事についての授業があったのだが、そこでは今後も課題になってくる教員の働き方について学んだ。残業、教員の精神疾患、部活動問題、教員による体罰、校則、不登校といったあらゆる事例があり今後どのように課題解決していくかを考える良い機会となった。個人の課題としては、これらの教育に関する課題についての自分なりの考えが見つけられなかったことである。誰かが解決してくれるだろうではなくて、自分のこととして考えられるようにしていきたい。

成績を見た中で反省すべき科目は「工業科教育法A」の授業である。ここでは工業高校で習う様々な科目の基礎知識について学んだ。そこでは過去に解いたことがある物理の問題等はできたのだが、今までやったことがなかった電気科や情報科で習う問題が壊滅的に解けなかった。本学卒業の先輩の中に環境応用化学科卒業で工業高校の電気科の教員になった方がいると言っていたため、仮に自身の専門科目ではない教科を担当するとなった場合非常に苦戦する未来が見えている。得意ではない分野であっても日々の勉強を通して着実に生徒に教えられるよう力をつけるべきであると反省した。

教育実践演習で良かった点は、他の学生の授業を受けてみて感じたことを自身の授業に取り入れることができたことである。またすぐにフィードバックをもらうことができたため迅速に改善することができた。

教育実習は、これまで学んだことを最大限発揮することを目標とした。具体的には教育実践演習で課題としてあった、教材研究についてである。私は物理の科目を担当したのだが、教育実践演習では力についての具体例を出す際になかなか良い例を提示することができず、苦戦していた。そこで物理への知識を深めるために様々な人が出している動画を見てどのような教え方をしているのか研究したり、中学物理ではどこまで教えているのかを調べたりした。授業中では生徒が実験や練習問題に意欲的に取り組んでいる姿がみられた点はよかった。しかし課題としては、高校生の時の自分に置き換えて考えられなかったことである。私は高校2年生の時物理がさっぱりわからず途方に暮れていた。私のような生徒が意外と多い事がわかり、もっと丁寧に焦らずに教えればよかったと少し後悔している。これは物理の授業での反省点に限らず、誰かに教える際にはその人の能力やニーズを良く見極めて教え方を工夫していきたい。

大学1年生から学んだ教職課程を振り返って、思い出すことや書きたいことは多くありますが、その中でも教育実習が非常に印象に残っています。教育実習ではこれまで教職課程で学んだことの集大成として、ホームルーム活動の運営や研究授業の実施と振り返りなど自分の持っているスキルを最大限発揮できたと思っています。研究授業で扱った分野は、情報Ⅰの知的財産権の分野であり、その分野に関係する法律や周辺情報について調べるなどして授業への準備を行いました。

5月27日から2週間の日程で行った教育実習では、初日の帰りのホームルームから最終日の帰りのホームルームまでの全てを行いました。ホームルームの時間は学級活動であるため、時間配分や進行の方法を工夫して行いました。ホームルームを行う都度、学級の指導教諭の先生からフィードバックをいただくことができました。

ホームルームで話す内容は、職員室からの連絡事項に加えて、学級ごとの確認周知事項や先生からの一言も含まれています。ホームルームを行う中で私は、連絡事項の伝え方、伝える順番、先生からの一言で何を伝えるかを考えることを意識していました。重要度が高い内容もあるため、生徒をしっかりと聴く姿勢させてから始めるといった工夫も行いました。ホームルームを行うごとに、進行がスムーズになり、楽しさややりがいを感じました。

初日より授業見学を行い、情報科以外の科目の授業を見学させていただくことができました。このことで、授業の展開方法、生徒とのコミュニケーションの取り方といったことを学ぶことができ、とても貴重な機会だったと振り返ります。

授業実践と研究授業に向けての準備と実際に授業をしてみて感じたことや学んだことについて述べます。

準備では、授業内容が生徒にわかりやすいよう、スライドの文字のサイズや重要な部分のハイライト、説明する順番などを工夫しながらスクリーンに投影する資料を作成していきました。スライドのメモ機能を使って、授業時に話すことのアウトラインを組み立てました。授業では教科書の内容だけでなく、問題演習やタブレット端末を活用して調べることも行いました。そのため、授業時間の配分を考えつつ授業スライドを作っていくことを大切にしました。研究授業に参加してくださった先生方からコメントをいただきました。いただいたコメントは「スライド資料が見やすかった。」という意見や「クラスごとに特色が違うので、よりそれに合わせた対応ができると良い。」といったものや「授業が聞きやすく、流れが比較的スムーズだった。」というコメントもあり、私の自信につながっています。

これまでの教職課程の学びや母校での教育実習を通して、教員としての仕事の大変さや難しさ、そしてやりがいを学ぶことができ、貴重な経験となりました。そして大

学の先生方、母校での教育実習でお世話になった先生方に心から感謝申し上げます。

建築学部 建築学科4年 七戸福蘭

4年間の教職課程を通して教育に関する基礎知識・理解をはじめ、教員に求められる資質・能力や現状の教育環境・生徒像について等、教育に関するあらゆる知識を学ぶことができた。

特に、教育実習での学びが大きかったと感じている。初めは自身が教員として教壇に立つことや、生徒とのコミュニケーションに不安があったのだが「教育実習事前・事後指導」や「工業科教育法B」等の授業で行った指導案作成、教壇実習が練習となり自信に繋げることができた。実際に教育実習に参加して、教員の仕事の楽しさ・面白さを学ぶことができたが、同時に本当に大変な2週間であったことも事実である。私が担当したクラスは素直な生徒が多く、コミュニケーションを取ることに対しては苦労しなかったのだが、3年生を担当したこともあり授業内容の難易度が高く、理解度の高い授業展開を行うことが難しかった。研究授業前最後の教壇実習では、教えるはずの内容と教えている内容が違うとの指摘を受け大失敗をしてしまったことで、授業を行うことに対して恐怖を覚えながらも、研究授業は気持ちを切り替えて精一杯頑張った。「新たな生徒の一面が見れた良い授業だった」と先生からコメントをいただいたが、個人的には多くの課題があったと感じている。主な課題は、研究授業前の失敗原因である教材研究の不足である。自分的には勉強をしてその単元を理解したつもりだったのだが、演習問題に使用した問題が授業の内容と違うということがあった。これに対しては、自分の考えを他者と共有し理解のすり合わせを行うことで解決できたのではないかと考える。実際、私の担当する授業は月曜日・火曜日・水曜日にあったため週の前半は授業を行うことに集中、木曜日・金曜日で来週の授業の打ち合わせを行い土曜日・日曜日で授業準備をしていたため、授業の打ち合わせは一回のみ。特に月曜日の授業に関しては一回以上行うことが難しいと感じていた。研究授業は打ち合わせを2回程行っただが、それでも教材研究で補えた改善点が無かったとは言えず、圧倒的に建築学に関する知識が足りないと痛感したのと同時に、自分の知識だけで授業を行おうと考えず、少なくとも現段階では他人を頼るということが必要だったのではないかと熟考する。一方で生徒とコミュニケーションを取る姿勢や、その中で全員の生徒に平等に接すること、「私」らしい授業を展開できたことは教育実習による成果として感じる事ができた。

4年間の教職課程を振り返ると、教職について学ぶことはとても楽しく面白いものであった。将来、私は教員にはならず民間企業へ就職することを選択したが、それでもこの4年間の教職課程は有意義であったと思う。教職課程を履修していない人に比

べてマルチタスクをこなすために徹底的にスケジュール管理を行い、ときにレポート提出日をリマインド設定し忘れて未提出や最低限の文章での提出になって落ち込むこともあったが、4年間成績を維持し続けてきたのは成果であるのではないかと考える。同時に、4年間学んできたことは直接「何か」に結びつくわけではない。しかしスケジュール管理や成績維持する力、人前で発表する力など多くのことに結びつけ、これからの社会生活・残りの大学生活に役立てたい。

工学部 電子工学科4年 永澤颯太

私が教職課程や教職実践演習を通して学んだ最も大きなことは、人を育てることの大変さとやりがいについてです。教育の現場において、生徒一人ひとりの個性や学びのペースは異なり、その多様性を尊重しながら指導することがいかに重要であるかを強く実感しました。特に、授業計画を立てる段階で「この内容で本当に生徒が理解し、興味を持ってくれるのか」という不安に直面することがあり、生徒の反応が自分の予想と違っていたり、うまく意図を伝えられなかったりする場面が何度もありました。模擬授業の際には、具体例を用いて説明することで理解を深める工夫をしたつもりでしたが、生徒役の同級生から「例が複雑すぎて分かりにくい」とフィードバックを受けたことがあります。そのとき、自分が伝えたい内容をいかに分かりやすく、そして興味深い形で提供するかが教師としての大切な課題であることを痛感しました。また、実習中には、ある生徒が特定の課題に取り組むことに消極的であった際、ただ叱るだけではなく、その理由を聞き出し、一緒に解決策を考えることの大切さを学びました。生徒と信頼関係を築くことができれば、結果としてその子の成長を後押しすることができるという体験は、私にとって非常に貴重なものとなりました。また、授業だけでなく、学級経営や学校行事の運営に関わる中で、教師としての多様な役割を理解しました。生徒にとって教師は、単に教科を教える存在ではなく、時には相談相手であり、時には道を示す存在でもあるのだということを深く感じました。

一方で、教師の仕事の大変さについても実感しました。生徒一人ひとりの状況に応じた指導を行うことや、保護者や同僚教師との連携を取る必要があること、さらに学校全体の運営に関与する中での多忙さなど、理想と現実のギャップに悩むこともありました。しかし、その中でも「生徒の未来を育む」という教育の本質に立ち返ることで、これらの困難を乗り越える意欲を持つことができました。

教職課程や教職実践演習を通して得たこれらの経験は、私が教育に対する姿勢を再確認するきっかけとなりました。そして、人を育てるということは、一筋縄ではいかない難しさがある反面、それを超える大きなやりがいがあることを深く理解しました。この学びを今後は会社の人材育成の際に役立てたいと考えます。

教員養成審議委員会 2024 年度活動実績

第 1 回

1. 開催日：持ち回り形式（配信日：令和 6 年 5 月 13 日（月））
2. 議題：
（審議事項）
 1. 「2023（令和 5）年度教職課程の全学的な組織体制の整備及び自己点検・評価（案）」について

第 2 回

1. 開催日：令和 6 年 6 月 28 日（金）
2. 議題：
（審議事項）
 1. 専修免許状教員養成の目標の訂正について
 2. 大学院教職課程カリキュラムについて
 3. 教職ポートフォリオの運用について
（報告事項）
 1. 令和 6 年度目標および主要計画
 2. 令和 6 年度教員採用実績
 3. 令和 6 年度教育実習状況
 4. 1、2 年生の教職課程履修状況
 5. Web サイト（教職関係）更新について
（周知事項）
 1. 令和 7 年度教育実習希望者と今後の指導計画について

臨 時

1. 開催日：持ち回り形式（配信日：令和 6 年 9 月 6 日（金））
2. 議題
（報告事項）
 1. 大学院教職課程の変更届について

第3回

1. 開催日：持ち回り形式（配信日：令和6年9月27日（金））

2. 議題

（審議事項）

1. 令和7年度教育実習希望者について

第4回

1. 開催日：令和7年2月14日（金）

2. 議題：

（審議事項）

1. 2025年度の自己点検評価における重点項目について

（報告事項）

1. 2024年度の自己点検評価報告書について

2. 教員採用の状況について

3. R8年度大学院工学研究科改組に伴う教職課程に係る教育課程の変更届

（認可）について（文科省通知報告）

（周知事項）

1. 2025年度学生便覧「教育職員課程の履修の流れ」についての確認依頼

第5回

1. 開催日：持ち回り形式（配信日：令和7年3月17日（月））

2. 議題

（審議事項）

1. 令和7年度教育実習希望者について

2. 令和8年度教育実習希望者について

3. 教員養成審議委員会2024年度総括ならびに2025年度目標および主要計画について

（報告事項）

1. 教職課程の変更届について

東北工業大学 教職研究紀要刊行規程

令和2年4月1日

総合教育センター（教職分野）

- 1 東北工業大学総合教育センター（教職分野）は、『東北工業大学 教職研究紀要』（以下、『教職研究紀要』）を刊行する。
- 2 『教職研究紀要』の編集は、東北工業大学教職研究紀要編集委員会が行う。
- 3 『教職研究紀要』は、研究論文、研究ノート、実践記録、書評などから構成される。
- 4 『教職研究紀要』に掲載される内容は、次のとおりとする。
 - （1）原則として教職教育に関するものとする。
 - （2）研究論文等は、未発表のものに限る。
- 5 機関紙の発行時期は、原則として年度末とする。
- 6 この規程に関する事務は、総合教育センター事務室において行う。
- 7 この規程の改廃は、東北工業大学教職研究紀要編集委員会で決定する。

東北工業大学教職研究紀要

第 10 号

発行日 2025 年 3 月 31 日

発 行 東北工業大学総合教育センター（教職分野）
宮城県仙台市太白区八木山香澄町 35-1
Tel 022-305-3700

印 刷 株式会社 郵辨社

THE TEACHER EDUCATION RESEARCH BULLETIN of TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Vol. 10
March 2025

Contents

Research Article

- Towards a Qualitative Analysis of Self-Evaluation of
Teacher's Competencies
..... OGAWA Kazuhisa..... 1
- A Memorandum on the Usage of the Concept of "Information Society"
..... KATAYAMA Fumio.....11

Center for General Education (Teacher Education Division)
Activity Results for FY2024

Teacher Education Advisory Committee Activity Results for FY2024

Center for General Education (Teacher Education Division)
TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

35-1, Yagiyama Kasumi-cho, Taihaku-ku, Sendai,
982-8577, Japan